「満蒙」国境線攻防の宣伝映画だ。

映画のチラシによると、映画の後援は現地○○部隊指導、蒙古軍騎兵団、満彊聯合委員会、蒙古連盟自治政府、風俗考証チハル盟長、蒙古現地ロケ二ヶ月、映画に出場する人馬、羊五千頭、ラクダ一千頭、牛馬数千頭、蒙古軍騎馬一千頭、蒙古人エキストラ延人員一万五千人、ロケ行程二千五百キロ。

そして「撮影準備開始以来実に半歳愈愈初秋九月登場」とある。1939（昭和14）年の９月である。９月15日には、ノモンハン戦争の停戦協定が結ばれた、まさにおなじときである。

1939年５月11日開戦のノモンハン戦争の前夜の状況を物語る映画である。チラシの宣伝文が事実ならば、まさにノモンハン戦争を同時に進行、制作されたものとなる。制作日数は６ヶ月あるいは９ヶ月を要したという。

出演した水島道太郎（従兄弘一役）の「わが青春の大都」（『写真集懐かしの大都映画―もう一つの映画史』（ノーベル書房、1992）によると、往時の撮影の状況がうかがえる。

> 14年の「地平線」も思い出深い作品である。吉村操監督で、私たちははるかモンゴルロケを敢行した。著名な民族学者の鳥居竜三の自伝的映画だった。その鳥居役は藤間林太郎（現俳優の、藤田まことの実父）、私は彼の助手という役所であった。釜山から北京、そしてウランバートル近くまでの延々の旅だったが、パオで起居し、見渡す限り大草原でのロケは今も記憶に鮮明である。そのロケに何故か大宅壮一が同行していた。同行の理由は定かではないが、パオの中に入り、たずねまわっていたエネルギッシュな彼の姿が印象に残ってきる。

鳥居龍蔵夫妻は1906（明治39）年、蒙古の喀喇沁王府の日本語教師となった。1907（明治40）年鳥居君子・幸子とともに赤峰からシラムレン河を渡り、ブイルノール湖畔から巴爾喀蒙古、ハルハ河に沿って外蒙古のデッタバイシン、大興安嶺をへて、赤峰にもどる。蒙古人の人体測定、民俗、遺跡の調査をおこなった（鳥居龍蔵『蒙古旅行』1911年）。のちにノモンハン戦場となった国境地帯だ。

鳥居龍蔵は、1930年８月～12月に、遼の慶陵、遼太祖陵などの調査をおこなった（鳥居龍蔵・きみ子『満蒙を再び探る』1932年１月刊）。あとがきにあたる「満蒙の風俗と生活」の末尾に記す。満蒙への思いが伝わってくる。

> 私どもは一日に早く平和の日が来るように祈っている。…中国人も蒙古人も愉快なところがあって、ある一部の日本人のように陰気でない。自国の文明に自惚れないで、隣国の同胞を尊重して、大いに学ぶべき点が少なくはあるまいかと思われる。どうしても日本は早晩中華民国の人々と共に協力して、極東の発展シンポジュウムを計るようになる時代が来なければならない。
>
> 昭和六年十二月三十一日　鳥居人類学研究所にて　鳥居きみ子

同年の1931年９月18日、「満州事変」が始まった。鳥居龍蔵・きみ子はけっして戦争を賛美してはいない。

鳥居龍蔵は映画の企画や上映について知っていたか、日記などにのこしているか、確認できて

いない。脚本では慶陵、遼の皇帝陵の調査についてはふれられていない。

1939年７月、田村實造・小林行雄らが慶陵の調査に向かった。８月、鳥居はハーバード燕京研究所客座教授として北京に赴く。映画が封切られたのは９月であるから、映画を見ていないのであろう。ただ『日本映画』のシナリオは1939年８月に発売されている。原作・脚本では考古学者の妻は故人として脚色されている。脚本とはいえ、好ましくはないにちがいない。鳥居龍蔵と原作者の大宅壮一との関係はどのようであったのかさだかでない。

わたしは、2009年９月18日、吉林省長春から列車で興安嶺の阿爾山を越え、ハルハ河沿いに平原・砂漠地帯のノモンハン（諾門罕）の戦場に立った。戦いが勃発して70年である。戦場の一角に戦争博物館がつくられている。78年まえの「満州事変」勃興の日だった。

2010年７月、ウランバートルから東北360km、ロシア国境に近い 東部地域では韓国隊によるドルリックナルス匈奴墓群の発掘を見学した。モンゴル東部から興安嶺、鮮卑や匈奴、さらに西にはスキタイ文化がひろがっている。鳥居龍蔵が匈奴やスキタイに関心をいだいていたことはその蔵書からもわかる。鳥居龍蔵はモンゴル東部の国境地帯を南北に縦断し、王府をたずね、モンゴル族の民族調査をした。ウランバートルの歴史民族博物館では往時の写真が展示されている。鳥居龍蔵・きみ子の調査記録は百年前のモンゴル、戦争と平和を映しだしている。

2008年、城戸久枝『あの戦争から遠く離れて―私につながる歴史をたどる旅』（情報センター出版局、2007）は第39回大宅壮一ノンフィクション賞をうけた。「残留孤児」の父親の生い立ちを描いたものだ。牡丹江流域の頭道河子村（旧牡丹江省）の地で育てられた。城戸久枝さんは徳島大学と吉林大学で学んだ。わたしも長春の関東軍司令部近くの吉林大学の宿舎に３ヶ月滞在したことがある。黒龍江省佳木斯から牡丹江市をへて、寧安東京城の渤海上京龍泉府を歩いた。

映画「地平線」の原作が大宅壮一であった。満州国、関東軍との関係、この映画はノモンハン戦争、「昭和史」を語るうえで重要な資料だ。　　（2011年３月3日　鞍山から列車で瀋陽に）

《引用文献》

鳥居龍蔵 1922『北満州及び東部西伯利亜調査報告』（『朝鮮総督府古蹟調査特別報告』2、『鳥居龍蔵全集』8）
鳥居龍蔵 1928『満蒙の探査』（『鳥居龍蔵全集』9）
鳥居龍蔵・君子・幸子・緑子 1929『西比利亜から満蒙へ』（『鳥居龍蔵全集』10）
鳥居龍蔵・きみ子 1932『満蒙を再び探る』（『鳥居龍蔵全集』9）
鳥居龍蔵 1943『黒龍江と北樺太』生活文化研究會（『鳥居龍蔵全集』8）
山内昌之 1999「アジアとヨーロッパ―日本からの視角―」（『岩波講座世界歴史』23、岩波書店）
東潮 2009「鳥居龍蔵のアジア踏査行―中国西南・大興安嶺・黒龍江（アムール川）・樺太（サハリン）―」（『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』17）
徳島新聞 2010「鳥居龍蔵モデル70年前の映画―県内上映目指す」（2010年２月15日）
徳島新聞 2010「モンゴル舞台冒険活劇―鳥居龍蔵の映画上映」（2010年８月５日）
徳島新聞 2010「鳥居龍蔵モデルの映画「地平線」ラジオキャスター梅津龍太郎さん語る」（2010年８月８日）